

The Futaka Spirit

(現教だより第8号)

き組 縦割り創造活動

活動名 「アルミ缶で『ナニコレ!』アート」

支援者 住田 恵津子 先生

住田実践では、本校の創造活動で育みたい価値と、これまでの道徳における価値との違いを明確にした上で、子どもが自分達にとって意味のある価値を創造するための手立てについて具体的に提案していただきました。

【子どもの活動】

1 アルミ缶アートをみんなで見える。



アルミ缶アートを見て感受する



子どもの素朴な思いを板書して共有する

2 写真やVTRをもとにこれまでの活動を振り返る。

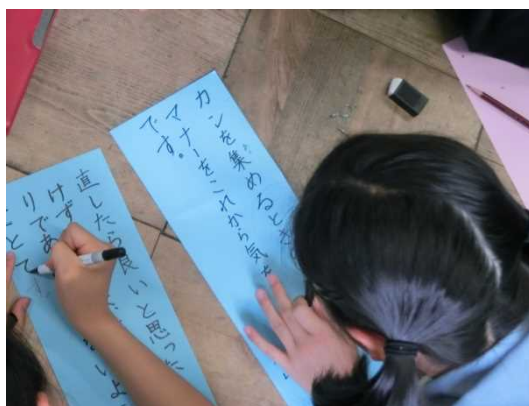


自分達の姿を客観的に見て取る



エピソードをもとに自分の内面を見つめる

3 良かったことと課題をカードに書く。



集団の目的に照らして振り返る

4 なりたい集団の姿に着目し、これからの目標を考える。



仲間の素敵な姿を共有

(文責 橘 慎二郎)

【住田先生コメント】

- ① 自己決定（集団での）が意欲→4 観点→6 視点につながる重要な鍵になる。
- ② 教師は価値を押しつけるのではなく、子どもが自分らしさを見付け、なりたい姿に必要な価値を自分で見付けられるように支援する。
- ③ 活動中に他者評価が即時的に可視化できるような場づくりをし、交流する際には発達段階の違いが意味付けになるような他者評価を生かす。

住田実践【き組 縦割り創造活動】

～ アルミカンで「ナニコレ！」アート ～



本実践の主張点

「問題解決」と「なりたい自分」をつなぐために、

- I じっくり対象と関わり、自己や他者、集団の願い思いを自覚する場をもつ。
- II 自己評価や他者評価を可視化し、自分なりの意思形成を促す。

創造活動における価値の捉えについて

住田実践では、本校の創造活動において子どもが創造する「価値」と、これまでの「道徳的価値」の違いについて明確に示されている。創造活動では、理解した価値を生かすという考え方ではなく、活動を通して自分や集団にとって意味のある多様な価値を生み出すことをねらっていく。住田提案では創造活動における「価値」について、

- ・そこに自分自身の問題が存在すること
- ・自分や集団のために必要な意味のある価値であること

という2点が重要であると示された。さらに、「こうすべきだ」という答えを求めるのではなく、「どうすべきか」という問いを子どもたちと共に考えようとする教師の姿勢が重要であると述べられている。本提案では色分けされたカードをもとに子どもたちが思いを整理し、次への願いにつながる話し合いが行われた。アルミカンでアート作品をつくるという具体的な活動に支えられていたこともあり、多くの子どもたちが成果と課題の両面に目を向けることができていた。このことから、やはり創造活動においては、子どもが主体となって問題解決を繰り返すことのできる体験活動の場を設定し、一人一人の自己決定を通して多様な価値が表出される状況をつくることが重要であるといえる。

住田実践で印象的だったのは、カードを書く際、低学年の子どもも進んで自分の言葉を綴っていた姿である。低学年の子どもたちの表現は、高学年に比べると確かに内容は稚拙なものであったが、住田実践ではその違いを大切に捉えて支援に生かしていた。発達段階がそれぞれ異なる集団だからこそ、子どもたちは互いの内容に感受し、他者評価を通じて意味付けをすることができていた。縦割り集団で問題解決を進める際に浮き彫りになる発達段階の差を、教師が課題として捉えるのではなく、子どもの自分らしさを認めていくというスタンスを取ることで、子どもは自分にとって意味のある価値を自ら見付けていくことができると考える。

常時掲示の活用について

住田学級では、子ども一人一人について掲示スペースが常設されており、育みたい見方・考え方を通して子どもが見つけた友達のよさを、常に全員が意識できるよう工夫されていた。また、本学級ではこの見方・考え方の6つの視点を「つづけるめがね」「まもるめがね」「おもうめがね」「かんしゃするめがね」「かえるめがね」「ひろげるめがね」という、どの学年の子どもにとっても分かりやすい、子どもの言葉で共有し、子どもたちが常に見方・考え方の眼鏡を通して自分や友達のよさを見付けていこうとする意欲がもてるように考えられていた。この常時掲示の効果は大きく以下の2点ではないかと考える。

- ① 異学年だからこそ意味のある見方・考え方の眼鏡で互いを肯定的に捉え、価値付けることが日常化することで、互いの存在を認め、分かち合える支持的風土の形成につながる。
- ② 子どもがなりたい自分の姿を可視化できるようにすることで、目的に立ち返りながら問題解決を進めていこうとする意識が継続する。

実際、掲示板にはプロジェクトだけでなく、1年生を迎える会やふれあい運動会など、縦割り集団で取り組んだ行事についても具体的なよさがたくさん記されていた。これを一年間続けていくことで、個々の変容のみならず、集団全体の育ちの傾向も明らかになると考える。

成果と課題

- 具体的活動またはその振り返りの過程における即時的評価は、子どもの多様な見方・考え方の表出につながり、価値が育まれやすい状況が生まれる。
- 常時掲示を活用することで、子どもと評価の基準を共有することができ、見方・考え方をもとにした他者評価が繰り返される。
- △ 本時の教師の支援の在り方についてはさらに考えていく必要がある。「気づき」「問い・願い」の場面において教師の意図性が強くなるのは仕方がないが、「試行錯誤」の段階に向けて、どのように子どもに委ねていくのか、今後の提案を通して明らかにしていきたい。